教育学部

国語（問題）

2019年度

〈2019 H31130015（国語）〉

注意事項

1. 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
2. 問題は2～15ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
3. 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
4. マーク解答用紙記入上の注意
   （1）印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
   （2）マーク欄にははっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	●良い	○悪い	◎悪い
マークを消す時	○良い	○悪い	◎悪い

5. 記述解答用紙記入上の注意
   （1）記述解答用紙の所定欄（2カ所）に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
   （2）所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
   （3）受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	
0	
1	
2	
3	
4	
5	
6	
7	
8	
9	

   （4）受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

（例）
3825番
⇩

万	千	百	十	一
	3	8	2	5

6. 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
7. 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
8. いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
9. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

（一）

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

徳にもとづいた活動によって得られる安定した、持続的な幸福は、都市国家という安定した、持続的な共同体の存在のもとで初めて、安定した、持続的な幸福たりうる。逆にいえば、[1]ソロンからアリストテレスへと受け継がれたギリシャ的な幸福観は、都市国家が個と共同性の交流の場として安定性と持続性を備えている、という歴史的条件のもとで初めて現実的な意味をもちうるものだった。アリストテレスの生きた紀元前四世紀中葉から後半にかけての都市国家は、共同体としての統一性を急速に失いつつあったが、アリストテレスの構想する幸福はあくまで共同体としての都市国家を土台としてなりたつものだった。幸福は完璧な善であり、自足した善である、とは『ニコマコス倫理学』のくりかえし説くところだが、幸福のその自足性について、つぎのような説明がある。

ここでわれわれが自足的と言うのは、「その人自らのみに足りる」という観点、すなわち［X］に足りるという観点からではなく、両親や子どもや妻、一般に［Y］に足りるという観点からである。というのも、人間はその自然本性において国家（ポリス）を形成するものだからである。（『ニコマコス倫理学』）

人間が個人として生きることと共同体の一員として生きることがごく自然につながっていると考えるのが、自立した自由な都市国家（ポリス）に生きる市民のうちにおのずと育（はぐく）まれた人間観であり、社会観であった。その人間観ないし社会観の根強さは、右の引用で、「人間はその自然本性において国家（ポリス）を形成するものだ」ということばとなってあらわれているし、同趣旨の「人間は都市国家（ポリス）的動物である」という命題は同じアリストテレスの代表作の一つ『政治学』の根本命題とされている。

とはいえ、その人間観ないし社会観を育んだ都市国家が、もはやかつての堅固不抜さを保てなくなったのがアリストテレスの時代だった。都市国家アテネの全盛期をペリクレス執政のBC四四三年からBC四二九年に置くとして、その最終期に早くも始まったペロポネソス戦争その他の戦争や、フィリッポス二世とアレクサンドル大王の治下でのマケドニアの軍事的発展は、都市国家の共同体としての統一性と独立性を大きくゆるがすものだった。個人と共同体との［Z］を前提とする人間観ないし社会観がなりたちにくいのが当時の都市国家の現実だった。共同体の秩序が綻（ほころ）びつつあるというのは、そういうことだった。

そういうなかで、しかし、アリストテレスは共同体的な人間観ないし社会観を堅持し、共同体的な人間として生きることに幸福を求めようとした。

となれば、[2]幸福を求めることは共同体の綻びを修復し、個人と共同体とが自然につながるようなかつての共同体の再建という課題を、合わせて背負いこむことを意味した。幸福を求めることは、個人として生き、個人として快適な生活や欲望の充足を求めることではなく、個人としての生活と共同体の一員としての生活が生き生きと交流する都市国家の再現をめざし、その努力のなかで個と共同体とのつながりを実感することでなければならなかった。

が、何度もいうように、共同体秩序の綻びは古代ギリシャ史の大きな流れが強いたものというべく、都市国家の再建は容易にかなうものではなかった。時とともに綻びがしだいに大きくなるというのが歴史の赴くところだった。そうした趨勢（すうせい）のなかで共同体的な人間観ないし社会観を堅持し、共同体の再建を不可欠の課題とするような幸福を求めようとすれば、幸福は開かれた明るい未来に浮かぶ安らかな目標というより、なにやら重くのしかかる息苦しい当為（注①）のようにイメージされるのは避けられなかった。

となれば、幸福が善と堅く結びつき、幸福が倫理学――人間はいかに生きるべきかを問う学問――の重要きわまる概念をなすことは、[3]まことに理にかなったことだといえよう。アリストテレスの幸福のとらえかたからすれば、幸福が『ニコマコス倫理学』の中心的な主題の一つになることは、理の当然といえることだった。

が、そう納得した上でなお、幸福が善と――生き方の善悪と――堅く結びつくことにわたしは違和感を覚えざるをえない。

幸福な活動が徳にもとづいた活動であり、もっとも安定した、もっとも持続的なものだというところに立ちかえって、違和感のよってきたるところを考えてみたい。

徳にもとづいた、もっとも安定した、もっとも持続的な活動といえば、さまざまな活動の最上位に位置する行動がそれだと考えられる。そして、幸福とはそういうものだとアリストテレスはいう。幸福とは、さまざまな活動のなかで最善のもの、最上のもの、最高のものだ、と。

さまざまな活動のあいだに徳を尺度とした価値の序列を設け、序列の最上位に位置するものを幸福とする。それがアリストテレスの倫理的思考図式だ。

その思考図式に、人間はその本性からしてポリス的（社会的）動物だという人間観と、共同体秩序が綻びつつあるという現状認識と、共同体秩序の再建こそが都市国家の最重要の課題だという当為が結びつくとき、社会秩序の確立と安定に資する行動こそが、人間的にもっともすぐれた行動と見なされ、それこそが最善・最上の幸福（な行動）と見なされたのだった。共同体の秩序は容易に再建できそうもないが、秩序の再建が個人の徳をも共同体の徳をも支えるものである以上、困難だからこそかえってそこに力を傾注することが徳であり、善であり、幸福であるとアリストテレスは考えた。となれば、幸福はわたしたちが日々の暮らしのなかで身近に実感し、また求めもする喜びや安楽や快適さからは遠く隔たるものとならざるをえなかった。『ニコマコス倫理学』のしめくくりをなす最終一〇章に、次の文言がある。

幸福な人生は、徳に基づくような生であると思われる。しかしそうした生活はまじめさを伴うものであって、遊びのうちにはない。そして、まじめな活動は面白おかしく遊びを伴う活動よりもすぐれており、また、すぐれているのが魂の部分にせよその人間自身にせよ、よりすぐれた者にとって為すのがふさわしい活動ならば、それだけますますまじめな活動であるとわれわれは主張するのである。そして、よりすぐれた者の活動は、そのことだけでもう、より善きものであって、いっそう幸福に満ちたものなのである。

さらに、どのような人間をとってみても、また奴隷でさえも、最善の人間に劣らず身体的快楽を楽しむことができる。だが、[4]奴隷に人間らしい生活を分け与えるのでないかぎり、だれも奴隷が幸福に与（あずか）るとは考えないのである。（『ニコマコス倫理学』）

[5]「よりすぐれた」「より善き」「いっそう幸福に満ちた」といったように比較級の形容詞が多用されるのが、幸福論にそぐわない。幸福を遊びから遠ざけ、まじめさに引き寄せて考えるのも、その説教臭が違和感を抱かせるが、幸福に上下の価値序列があるかに論じるその論法も、それに劣らず道学者風[注②]だ。

幸福が倫理学の重要項目たる徳や善と無縁の概念だというのではない。また、幸福といい、しあわせといい、それらが人びとの日々の暮らしのなかでのつき合いから生まれる共同体のありさまと深くかかわるものであることも認めてよい。が、だからといって、幸福が道学者風の説教の種になっていいわけはない。しあわせとか幸福とかといわれるものは、個人に即して考えるにせよ、共同体に即して考えるにせよ、日常生活に行きわたる静かで、安らかで、さりげない心のすがただと考えられるからだ。幸福に向き合うときには、倫理的な義務感は背後に退くべきで、生活の全体から、また体の全体から立ちのぼる好悪の情や快不快の感覚にゆったりと目を配る必要があると思う。遊びとまじめさを対比するアリストテレスの図式を借りていえば、幸福論には、遊びを、まじめさに劣らぬ人間の大切な営みととらえる遊び心が必要なのだと思う。

（長谷川宏『幸福とは何か』による）

注① 当為…なすべきこと。

注② 道学者風…道徳や道理にばかりこだわって、世の実態にくらく、融通の利かない様子。

問一 傍線部1「ソロンからアリストテレスへと受け継がれたギリシャ的な幸福観は、都市国家が個と共同性の交流の場として安定性と持続性を備えている、という歴史的条件のもとで初めて現実的な意味をもちうるものだった」とあるが、その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ ギリシャ的な幸福観では、都市国家が守るべきは、個人と共同体の生命や財産であり、それらが脅かされた状態ではもはや都市国家としては成立し得ないから。

ロ ギリシャ的な幸福観では、都市国家が本来、所属する個人と共同体に対して継続した安全性を保障することを前提にしており、それは歴史によって証明されているから。

ハ ギリシャ的な幸福観では、都市国家の存立に必要な、個人同士を結びつけて共同性を育むという営為が、人は競い合うという本来のあり方と背反しているから。

ニ ギリシャ的な幸福観では、都市国家が統治において正常に機能している場合に限り、そこに所属する個人や共同体には継続的に安定した生活が約束されているから。

ホ ギリシャ的な幸福観では、都市国家自体が外敵によって平和を脅かされている場合には、構成員である共同体や個人の生活がその影響を受けざるを得ないから。

問二 空欄 X ・ Y に入る言葉として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 利己的に生を送っている人

ロ 親しい人たちや市民とともに生を送っている人

ハ 健全に生を送っている人

ニ 奴隷にかしづかれて不自由なく生を送っている人

ホ 孤独に生を送っている人

ヘ 経済の発展よりも平和を願い生を送っている人

問三 空欄 Z に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 自由な選択

ロ 絶対の信頼

ハ 自然な交流

ニ 相互の依存

ホ 特異な結束

問四　傍線部2「幸福を求めることは共同体の綻びを修復し、個人と共同体とが自然につながるようなかつての共同体の再建という課題を、合わせて背負いこむことを意味した」とあるが、その「幸福」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　アリストテレスの考える幸福とは、その都市国家に所属する個人や共同体が統一性と独立性についてどれほど歴史に学ぶかということが最終的には問われるものであるということ。

ロ　アリストテレスの考える幸福とは、個人同士の関係性は相互扶助そのものであり、そうしたことが見失われない限りにおいて、共同体や都市国家に護られて生きられるということ。

ハ　アリストテレスの考える幸福とは、個人生活の安定や維持こそ重要であって、都市国家の側から個人に共同体の綻びの修復を義務付けるような制約を課さないものであるということ。

ニ　アリストテレスの考える幸福とは、個人の幸福は常々国家の動向と緊密な関係を持っており、それゆえ自身が今何を最優先させて行動するかという判断力が重要であるということ。

ホ　アリストテレスの考える幸福とは、あるべき共同体を前提としたものなので、共同体が変容している場合は、個人はその再建にも従事しなければならないものであるということ。

問五　傍線部3「まことに理にかなったことだ」とあるが、なぜそう言えるのか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　都市国家の再建を個人生活に優先するものとして認識させるために、共同体の中での交流は不可欠なものであり、そこで都市国家的動物としての人間観が作られたから。

ロ　都市国家の揺らぎに際して、倫理学が幸福を個人で完結するものとしてではなく、国家に至る共同体の護持に結びつけ、徳を積むことが幸福であると納得させることができたから。

ハ　都市国家の独立性とは、構成メンバーである個人の独立性が不可侵であることが前提であり、動乱によって個人が危機に直面する時には都市国家の独立も失われるから。

ニ　都市国家のほころびが歴史的に加速されてくると、かつては国家レベルで善であった価値観が揺らぎ始め、アリストテレスの倫理をめぐる学問に需要が高まるから。

ホ　都市国家が崩壊のきざしを見せはじめたのは、個人が共同体の存在を軽視し始めたことと連動しており、アリストテレスの幸福論がそれを指摘していたから。

問六　傍線部4「奴隷に人間らしい生活を分け与えるのでないかぎり、だれも奴隷が幸福に与るとは考えないのである」とあるが、ここでの「人間らしい生活」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　都市国家が求める善が何であるかを理解し、それを徳に基づいて成し遂げることを優先して実践するような生活。

ロ　自身が社会に対して善を為すために、必要な自由と経済力をもって、周囲との共同性に気配りを怠らないような生活。

ハ　衣食住に関する個人生活を誰からも侵害されることなく保持して、その次の段階として国家の協力要請に応じられるような生活。

ニ　遊びと仕事の双方を時に応じて選択できる自己決定権を持つとともに、それらが共同体や都市国家の利益と相反しない判断ができる生活。

ホ　何が人間の幸福であるかという自問自答を重ね、都市国家の危機に対して自身にできることを提言し得るような生活。

問七　傍線部5「「よりすぐれた」「より善き」「いっそう幸福に満ちた」といったように比較級の形容詞が多用されるのが、幸福論にそぐわない」とあるが、その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　筆者の考える幸福観においては、幸福とはいかなる相対化からも自由であり、個人が自分の実感を述べることの集積でしかないから。

ロ　筆者の考える幸福観においては、都市国家を支える様々な階層の人々は平等で、誰もが都市国家の安定のために努力するから。

ハ　筆者の考える幸福観においては、幸福とは都市国家の持続性を第一義にしているので、ランク付けの弊害が起きないものであるから。

ニ　筆者の考える幸福観においては、幸福とは主人からもたらされるものに過ぎず、それらが実感としてどう受け止められたかは問題にならないから。

ホ　筆者の考える幸福観においては、幸福とは外側からの基準で比較対照して評価の尺度に優劣をつけるようなものではないから。

問八　次の**イ**～**ホ**から、本文の内容に合致しているものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　個人と共同体との相互に支え合う関係は、あらゆる幸福観の起点となるものであり、それが危機に瀕した時、戦争が繰り返されたのである。

ロ　都市国家にとって、共同体の秩序維持は最優先されるべきものであり、その際に個人の生活を護持することは利己主義である。

ハ　ギリシャ的な幸福論の背景にあるのは、戦乱の歴史においても最終的には個人の認識において共同体の維持がなされて来たという事実である。

ニ　都市国家の存立を最優先にするアリストテレスの倫理的思考図式は、今日の個人の感じ方を重視する幸福観とは相容れない面がある。

ホ　幸福な人生がいかなるものかについて考える際、国家と個人という不可分な関係性の論議を除外することは空疎な結果を招きかねない。

（二）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

現代アメリカのネイチャーライター、ロバート・フィンチのエッセイに「鯨のように」と題する作品がある。ある日、作家が棲み暮らすケープコッドの海岸に鯨の死骸が打ち上げられた。海岸ならばよくある出来事だ。その日、海岸は人で溢れかえった。だれもかれもが打ち上げられた鯨を「目撃」しようと駆けつけた。

そんないっときの熱狂が冷めたあとの海岸にたたずみ、作家はあの大騒ぎはいったい何だったのかと考え込む。人はなぜ海岸に打ち上げられた鯨の死骸に殺到したのか。答はついに見つからない。さまざまな答が想定され、しかしどの答も不充分だと作家は考える。読みながら私たち自身もまた自分なりの解答を試みるかも知れない。「好奇心」と言ってしまえば簡単だが、根源的な問いというものがつねにそうであるように、問題はむしろ、なぜ人の心のなかにそのような好奇心が胚胎するのかだ。フィンチはやっと次のような答に到達する。

その答えはあまりに明白で、もう僕たちには答えとも思われなくなってしまった。僕は、人はこの宇宙で他者との出会いを渇望していると思う。それを自然と呼ぶにせよ、荒野、「素晴らしきアウトドア」、あるいは、どんな呼び方をするにせよ。僕たちは、わくわくしながら、甲ショウソウに駆られながら、人間とは別の生き物が僕たちを見つめ返してはくれないものかと探しているのだ。

「他者との出会い」、「人間とは別の生き物」に見つめ返されたい「渇望」が人にはあるのだという。それが鯨の死骸に群がった人間たちがその行動によって表現しようとしたことなのだと著者は語る。鯨を指して、「究極の不可知の他者」と言い換えてさえいる。「究極の不可知の他者」に見つめられたい願望。

自然をめぐるこのささやかなエッセイが伝えようとするのは、美術批評家ジョン・バージャーが「なぜ、動物を観るのか」というエッセイで問うたものと同質だ。1動物を「（文化的に）周縁化」してやまない近代は、動物園を初めとして、「本物の動物に似た玩具、動物図像の広範な商業的拡大」を推し進めたにもかかわらず、それは同時に「動物が日常生活から撤退し始めた時期」に相当するのだと指摘している。

動物の周縁化の最終結果がここにある。人間社会の発達に決定的役割を果たし、一世紀弱前まで、常にすべての人間が共に生きた、動物と人間との間に交わされた視線が失われつつある。動物を観ている来園者、［A］を相手から返されることのない人間は孤独である。人間は最終的に群れとして孤立していく種なのだろう。

「［A］を相手から返されることのない人間は孤独である」、しかるがゆえにヒトという生物種は「人間とは別の生き物が見つめ返してはくれないものか」（フィンチ、前掲）と相手を探し回るのだ。「動物と人間との間に交わされた視線」が失われつつあることを知るがゆえに、あるいは「人間社会の発達に決定的役割を果たした」動物という存在の周縁化になにがしかの危機感を覚えるがゆえに、ヒトは海岸に打ち上げられた鯨に向かって息せき切って駆けてゆく。フィンチは言う――「僕たちの肉体にとって食物と暖かさが必要なように、こうした意味での他者が、僕たちが人間であるためには不可欠である」。

ほんとうだろうか。ヒトがヒトであるためには〈他者〉が必要なのだろうか。〈他者〉としての動物がほんとうに必要なのだろうか。いったいどういう意味で必要なのだろうか。『平成幸福音頭』（一九九三）で藤原新也は言う――「日本の産業構造が大変動したここ数十年の間にその外部（自然）はとつぜん消えた。自然がとつぜん消滅したわけではない。自然を意識し、それと交わる日常生活が消えたのである。」2この発言とまっすぐに呼応するように、ジョン・バージャーは言う――「二十世紀の企業資本主義によって完結をみる激動は、十九世紀の

欧米に始まる。それによって人間と自然を繋いでいた伝統はすべて壊されてしまった。この崩壊が起こる以前に人間を取り巻く最初の社会を形成していたのは動物である」。

藤原もバージャーも時代設定こそ異なれ、近代がもたらした自然と人間の関係の根本的な切断を語っている。いずれも一見すると凡庸な発言に思えるが、「自然を意識し、それと交わる日常生活」の消滅、その深刻さの度合いを測ろうとする眼差しは、いずれの場合も、その問題意識の切実さにおいてきわだっている。その深刻さの内実は、それぞれの著書に明瞭であろう。たとえば、藤原新也の『東京漂流』（一九八三）と『乳の海』（一九八六）という代表的エッセイ集は、〈自然〉の喪失をその規矩[3]としている。東京のゴミ捨て場たる「夢の島」を駆けめぐり、ついには、かつてエゾオオカミ（絶滅）に施されたと同じ手法で毒殺された「東京最後の野犬　有明フェリータ」とは、そのような失われた〈自然〉の別称にほかならない。

人類史が数百万年という途方もない時間をかけて成熟させてきた「動物と人間との間に交わされた視線」や「自然を意識し、それと交わる日常生活」は、近代とともにあっという間に消滅したという事実を語ることによって、フィンチやバージャーや藤原新也は「自然教育」や「環境教育」あるいは「自然体験型学習」の必要性を直接的に問うているわけではない。直接的に問うどころか、このような問いはもはや間接的にでさえ不可能な問いであると考えているかも知れない。なぜなら、バージャーによれば、動物の文化的周縁化と消滅は、〈家族〉や〈見世物〉といったカテゴリーへの吸収として現実化されるからだ。〈家族〉や〈見世物〉としての囲い込みとは、本来〈外部性〉をきわだたせるはずの動物[4]＝自然が内部化されていくという意味である。

〈家族〉化とはペット化と同義であり、〈見世物〉化とは、たとえば動物園や動物写真と同義である。こうして動物たちは「可視化」されると同時に封じ込められてゆく。精細無比の動物写真を実現する望遠レンズ、フラッシュ、超小型カメラ、リモコンカメラといった装置は、人間の視覚能力をはるかに超えた世界をそこに捕捉し、「自然の驚異」を写し取る。だが、これらの画像が提示しているのは、「人間が動物を知れば知るほど、［　B　］」という逆説的な事態だ、とバージャーは指摘する。自然の徹底した〈内部化〉が気づかぬうちに深く進行しているのである。

文化地理学者イーフー・トゥアンによるならば、「造園の喜び、ペットを飼う楽しみ、また愛情という名の感情」も、たちまち〈支配〉に転化される。いや、〈支配〉そのものの現実態なのだ。トゥアンの『愛と支配の博物誌――ペットの王国・奇型の庭園』（一九八四）がとりわけ興味深いのは、「楽しみ、遊び、芸術の世界」における「力や支配」の行使に焦点を当てていることである。[5]文学も美的なるものもけっして「力や支配」と無縁な中立地帯ではありえない。環境問題が自然科学的知の問題だけでもなければ、社会構造的な問題、経済学的な問題だけでも片づかないことの証左がここにある。

振り返ってみよう。ロバート・フィンチのエッセイで語られた、鯨への人々の狂熱は、まさしく、いまだ〈内部化〉されざる自然（ネイチャーライティング研究では〈野生〉と呼ぶ）への狂熱にほかならない。鯨が「究極の不可知の他者」であるがゆえの狂熱――そこには〈外部〉が出現しているのだ。フィンチの言うように、私たちが人間であるためにはどうやら〈外部〉＝〈他者〉が必要なのだ。その欲求は無意識に手が届くほど根源的であるために、だれもがその必要性に気づくというわけにはいかないが、近代以前ならば、しばしば〈怪物〉的表象として神話化されイフされた「究極の不可知の他者」は、いまや〈自然〉としてその後ろ姿をかいま見るだけのかそけき存在に堕そうとしている。

（野田研一「世界・自然とのコミュニケーションをめぐって」による）

問九　傍線部甲・乙の片仮名を漢字に改め、記述解答用紙の所定の欄に楷書で記せ。

問十　傍線部1「動物を「(文化的に)周縁化」してやまない近代」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　近代において、人々が文化的な生活を営むために作り出す環境が、公害や環境破壊を引き起こすことで動物を人間の生活圏から遠ざけてしまったこと。

ロ　近代において、人々が文化的な生活を営む上で害のある動物を共同体の外に排除し、害のない動物を共同体の内に取り込んできたこと。

ハ　近代において、人々は自分自身の中に文化的な要素と、文化的でない要素とを区分し、その区分を周りの動物にもあてはめていったこと。

ニ　近代において、人々は自分たち人間を文化的に高度な存在とし、そうした文化的な尺度の中で動物を位置づけようとしてきたこと。

ホ　近代において、人々が自分たち以外の動物を身近に置くことをこのみ、愛玩動物として自らの周囲で生活するように工夫をしてきたこと。

問十一　空欄 A (二箇所)に入る言葉(漢字二字)を、記述解答用紙の所定の欄に記せ。

問十二　傍線部2「この発言とまっすぐに呼応する」とあるが、どういう点が呼応しているのか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　人間がまわりの自然環境を破壊する前には、人が動物と密接にかかわりあった生活を営んでいたということ。

ロ　人がまわりの自然との結びつきを失ってしまったために、人が動物に取り巻かれている環境を失ってしまったこと。

ハ　日本の産業構造の大きな変化が、一九世紀から二十世紀に至る欧米を含めた世界の経済環境の変化に影響されてきたこと。

ニ　日本において人々が自然との結びつきをうしなったのは、欧米における自然環境の軽視に端を発していたということ。

ホ　社会の構造が大きくかわっていくことで、人が動物を含めたまわりの自然とのつながりを失っていったこと。

問十三　傍線部3「規矩としている」と同じ意味を表しているものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　基調としている

ロ　中心としている

ハ　尺度としている

ニ　基礎としている

ホ　根拠としている

問十四　傍線部4「本来〈外部性〉をきわだたせるはずの動物＝自然が内部化されていく」とはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　もともと人々が容易には理解することのできない動物や自然という存在を、安心して理解できるようなものとして位置づけていくこと。

ロ　もともと人々の心に外から安らぎをあたえてくれる存在であった動物や自然が、やがて人々の内面にとって不可欠な存在になっていくこと。

ハ　もともとは屋外の自然環境の中におかれていた動物や自然が、人々が生活する屋内の環境に適応するようになっていったこと。

ニ　もともと人々にとって異質な存在であった動物や自然が、それゆえに珍しく希少な存在として共同体の中でもてはやされていくようになること。

ホ　もともとは人々の共同体の外側に存在していた自然や動物が、共同体に侵入して人々の生活をおびやかすようになること。

問十五　空欄 B に入る言葉として最も適切なものを、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　彼らへの愛情は薄れていく

ロ　彼らの価値は小さくなっていく

ハ　彼らとの交流は深まっていく

ニ　彼らについての謎がうまれる

ホ　彼らとの距離は遠ざかる

問十六　傍線部5「文学も美的なるものもけっして「力や支配」と無縁な中立地帯ではありえない」とあるが、それはなぜか。その理由の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　文学を含めた美しいものの中にも、人を力で攻撃したり、支配したりするという行為がしばしば描かれる傾向があるため。

ロ　人は何かを好み、美しいと感じるときに、その対象を自分に都合のよいように変えてしまおうとする傾向が生じるため。

ハ　人々が美しいと賞賛する行為は、その対象を自分よりもより高い存在として位置づける行為であり、相手の力のもとに従属する傾向を生むため。

ニ　人が何かを美しいと感じることは、人間以外の動物が持っていない文化的な能力であり、人がそれ以外の動物より優位にあると考える傾向を生むため。

ホ　文学などの芸術は、人々の理解を超えたものに魅せられており、人々を超えた力の存在を描こうとする傾向が生じるため。

(三)

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

良岑の宗貞の少将、ものへゆく道に、五条わたりにて、雨いたう降りければ、荒れたる門に立ちかくれて見入るれば、五間ばかりなる檜皮屋のしもに、土屋倉などあれど、ことに人など見えず。歩み入りて見れば、階の間に梅いとをかしう咲きたり。鶯も鳴く。人ありとも見えぬ御簾のうちより、薄色の衣、濃き衣、うへに着て、たけだちいとよきほどなる人の、髪、たけばかりならむと見ゆるが、

よもぎ生ひて荒れたる宿をうぐひすの人来と鳴くやたれとか待たむ[1]

とひとりごつ。少将、

来たれどもいひしなれねばうぐひすの君に告げよと教へてぞ鳴く①

と、声をかしうていへば、女おどろきて、人もなしと思ひつるに、ものしきさまを見えぬることと思ひて、ものもいはずなりぬ。男、縁にのぼりてゐぬ。「A ものものたまはぬ。雨のわりなくはべりつれば、やむまではかくてなむ」といへば、「大路よりはもりまさりてなむ、ここはなかなか」といらへ②けり。

時は正月十日のほどなりけり。簾のうちよりしとねさしいでたり。ひき寄せてゐ[2]ぬ。簾も、へりはかはほりに食はれて、ところどころなし。うちのしつらひ見入るれば、むかしおぼえて畳などよかりけれど、口惜しく[3]なりにけり。日もやうやう暮れぬれば、やをらすべり入りて、この人を奥にも入れず、女、くやしと思へど、制すべきやうもなくていふかひなし[4]。雨は夜ひと夜降りあかして、またのつとめてぞすこし空晴れたる。男は女の入らむとするを、「ただかくて」とて入れず。日も高うなれば、この女の親、少将にあるじすべき方のなかりければ、[5]小舎人童ばかりとどめ③たりけるに、かたい塩、肴にして酒を飲ませて、少将には広き庭に生ひたる菜を摘みて、蒸しものといふものにして、ちやうわんにもりて、はしには梅の花のさかりなるを折りて、その花びらに、いとをかしげなる女の手にて、かく書けり。

君がため衣のすそをぬらしつつ春の野にいでてつめる若菜ぞ

男、これを見るに、いとあはれにおぼえてひき寄せて食ふ。女、わりなうはづかしと思ひてふしたり。少将起きて、[6]小舎人童を走らせて、すなはち車にてまめなるもの、さまざまにもて来たり。「迎へに人あれば、今またもまゐり来む」[7]とていでぬ。それよりのち、たえずみづからも来とぶらひけり。よろづのもの食へども、なほ五条にてありしもの[8]は、めづらしうめでたかりきと思ひ出でける。

年月を経て、仕うまつりし君[9]に、少将おくれたてまつりて、かはらむ世を見じと思ひて、法師になりにけり。もとの人のもとに、袈裟洗ひにやるとて、

しもゆきの B 屋のもとにひとり寝のうつぶし染めのあさのけさなり

となむありける。

(『大和物語』による)

問十七 傍線部1「人来と鳴くやたれとか待たむ」の解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 人が来たと告げているが、私が誰を待っているのかを知っているのだろうか。

ロ 人が来ると鳴いているが、いったい鶯は誰のことを待っているのだろうか。

ハ 人が来たと言うが、その鶯の鳴く声を誰かが待っているのだろうか。

ニ 人が来ると鳴いているが、私は誰が来ると思って待ったらよいのだろうか。

ホ 人が来ると鳴いているが、鶯はいったい誰と共に待っているだろうか。

問十八　傍線部①「いひ」、②「いらへ」、③「とどめ」の主語は何か。最も適切な組み合わせを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　①　五条の女　②　少将　③　小舎人童
ロ　①　うぐひす　②　少将　③　女の親
ハ　①　少将　②　五条の女　③　少将
ニ　①　うぐひす　②　五条の女　③　少将
ホ　①　少将　②　五条の女　③　女の親

問十九　空欄 A に入る語として最も適切なものを、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　しばし　ロ　などか　ハ　また　ニ　かくこそ　ホ　すなはち

問二十　傍線部2「ゐ」を、漢字（一文字）で、記述解答用紙の所定の欄に記入せよ。

問二十一　傍線部3「口惜しく」、傍線部4「いふかひなし」はいずれも形容詞であるが、文中での意味として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　取るに足りない
ロ　しかたがない
ハ　みすぼらしい
ニ　耐えがたい
ホ　腹立たしい

問二十二　傍線部5「少将にあるじすべき方のなかりければ」の解釈として最も適切なものを、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　少将にご馳走をしようとしたが、貧しくてできなかったので。
ロ　少将を主人にしたかったが、どうして良いかわからなかったので。
ハ　少将を主人とみなしてもてなしたかったが、召使いがいなかったので。
ニ　少将に食事を出したかったが、まだ用意ができなかったので。
ホ　少将を客とし饗応したかったが、作法がわからなかったので。

問二十三　傍線部6「小舎人童を走らせて、すなはち車にてまめなるもの、さまざまにもて来たり」とあるが、それはなぜか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　女が風流な歌人であることに気づき、御礼をしたくなったから。
ロ　女の家が精一杯のもてなしをしてくれて、和歌にも心打たれたから。
ハ　女の家に何もなく、食事にも困って必要な物を取り寄せたから。
ニ　女と共に生活するために、自分のこまごました品が必要だったから。
ホ　宮中から迎えの人が来たので、参内の衣装などが必要だったから。

問二十四　傍線部7「む」と異なる意味・用法の「む」はどれか。次の和歌の傍線部のうち、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　今こむといひしばかりに長月のありあけの月を待ちいでつるかな
ロ　わびぬれば今はた同じ難波なるみをつくしてもあはむとぞ思ふ
ハ　たち別れいなばの山の峰におふるまつとしきかば今かへりこむ
ニ　今はただ思ひたえなむとばかりを人づてならでいふよしもがな
ホ　あらざらむこの世の外の思ひ出に今ひとたびのあふこともがな

問二十五　傍線部8「もの」とは何をさすか。本文中の漢字（一文字）で、記述解答用紙の所定の欄に記入せよ。

問二十六　傍線部9「君」とは何をさすか。漢字（一文字）で、記述解答用紙の所定の欄に記入せよ。

問二十七　空欄 B には、掛詞（懸詞）が入る。平仮名（二文字）で、記述解答用紙の所定の欄に記入せよ。

問二十八　本文の内容に合致するものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　女の親は、少将が娘のもとに泊まったのを知って驚きあきれた。
ロ　女は別の男性が来るのを待っていたので、少将が来たのを見て驚いた。
ハ　少将は、雨宿りのために入った家で女を垣間見て、その美しさに心動かされた。
ニ　少将は偶然出会った女に心ひかれて、長い年月にわたって女を大切にした。
ホ　女の家は昔は栄えていたが、今は荒れ果てて霊のすみかになっていた。

（四）

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。なお、設問の都合上、返り点・送り仮名を省略した箇所がある。

荊公・禹玉、熙寧中同在相府。一日、同侍朝、忽有[1]虱自荊公襦領而上、直縁其鬚。上顧之而笑、公不[2]自知也。朝退、禹玉指以告公、公命従者去之。禹玉曰、「未可軽去。輒献一言、以頌虱之功」。公曰、「如何」。禹玉笑而応曰、「屢遊相鬚、曽経御覧」。荊公亦[3]為之解[4]頤。[5]

（彭氏『墨客揮犀』による）

（注）荊公……北宋の王安石（一〇二一～八六）。　禹玉……北宋の王珪（一〇一九～八五）。
熙寧……北宋の元号。西暦一〇六八～七七年。　相府……宰相の役所。
虱……シラミ。人に寄生し血を吸う虫。　襦領……肌着の襟もと。

問二十九　傍線部1は、「タチマチシラミノケイコウノジユリヤウヨリシテノボルアリ」と読む。この読みに従って、記述解答用紙の白文に返り点を記入せよ。ただし、**振り仮名や送り仮名は付けないこと。**

問三十　傍線部2「上顧之而笑、公不自知也」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　上から下まで荊公を見わたして笑ったが、荊公は我関せずと平然としていた。
ロ　皇帝は禹玉の方に振り向いて笑ったが、荊公は二人の所作に少しも気づかなかった。
ハ　皇帝は荊公の方を振り返って笑ったが、荊公は皇帝が笑ったことを知る由もなかった。
ニ　皇帝はそれをじっと見つめて笑ったが、荊公はひとりヒゲのシラミに気づかなかった。
ホ　上の方から荊公を見下ろして笑ったが、荊公はもちろんヒゲのシラミに気づかなかった。

問三十一　傍線部3「未可軽去。輒献一言、以頌虱之功」の読みとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　未だ軽がるしく去るべからず。輒ち一言を献じ、以て虱の功を頌へよ。
ロ　未だ去るを軽んずべからず。輒ち一を献じて言ひ、以て虱の功を頌へん。
ハ　未だ可ならずして軽やかに去る。輒ち一言を献じ、以て虱の功を頌へり。
ニ　未だ軽がるしく去るを可とせず。輒ち献じて一言し、以て虱の功を頌ふべし。
ホ　未だ可ならざれば軽やかに去れ。輒ち一を献じて言ひ、以て虱の功を頌へん。

問三十二　傍線部4「屢遊相頻、曽経御覧」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　ふつうは嫌われ者のシラミなのに、このシラミは宰相のヒゲをうろうろしても、宰相に嫌われず、おまけに皇帝にも好まれ、まことに稀有なシラミであるということ。

ロ　シラミはとてもちっぽけで目立たぬ存在にもかかわらず、幾度も宰相のヒゲを遊び場として出かけ、皇帝に見つかっても少しも動じない大物ぶりがすごいということ。

ハ　宰相のヒゲを何度ももてあそび、しかも皇帝の爆笑を誘うほどの快挙をなしとげ、微小なシラミが、最高位の二人を手玉にとるという、まことに偉大な足跡を残したということ。

ニ　ふつうのシラミなら、すぐにひねり潰されてしまうところなのに、しばしば宰相のヒゲのあたりをうろうろし、それが皇帝のお眼鏡にかなうという、幸運に恵まれたということ。

ホ　通常、人でもお目にかかることがかなわないのに、このシラミはたびたび宰相のヒゲまで気ままに出かけ、しかも皇帝の目に留まるという、この上ない栄誉に浴したということ。

問三十三　傍線部5「解頤」と同じ意味で用いられている**漢字一字の語**を本文中から抜き出し、記述解答用紙の所定の欄に記入せよ。

〔以　下　余　白〕